

海外で心に残った記憶と背景

(東ヨーロッパ編)

2023年11月記 松村 眞

はじめに

外国を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様に、その時の記憶は時間が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いのでその後の参考になることも多い。本稿では東欧諸国で経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

東ヨーロッパの環境調査と政策提案 (1993年9月)

1993年の夏の終わり頃だったが、海外コンサルティング企業協会から協力の要請が届いた。この協会は経済産業省の外郭機関で、海外諸国の経済や工業など幅広い分野の調査と政策提案を実施している。要請のあった業務は、東欧諸国の環境実態調査と政策提案だった。東欧は長い間ソ連邦に属していたので、工業と環境問題に関する情報が不足していた。しかしソ連邦が崩壊した結果、東独の南部工業地域とチェコの北ボヘミア地方、およびポーランドの南部工業地域の大气汚染が深刻なことが伝わってきた。この黒い三角地域と呼ばれる一帯の大气汚染物質が、国境を越えて周辺国に酸性雨を降らせ、大規模な森林被害が発生していたのである。このため、1990年にEU・ハンガリー・アメリカが出資して中東欧地域環境センターが設立され、その後、日本を含む7カ国が資金を拠出した。中東欧地域環境センターはブタペストを拠点に情報を収集したが、主に政府機関から開示された資料だけでは日本の政策展開に不十分だった。そこで経済産業省は約10名の専門家を現地に派遣し、実情を詳しく調査することにした。専門家集団の役務は現地の関係機関や工場を訪問して情報を集め、実情をヒアリングし、そのうえで政策提案を作成することにあつた。日揮には専門領域として主に石油精製の分野を担当することが求められたが、これまでの私の総合的な視野に基づく提案実績から、政策提案の骨格となる基本方針の立案も期待された。

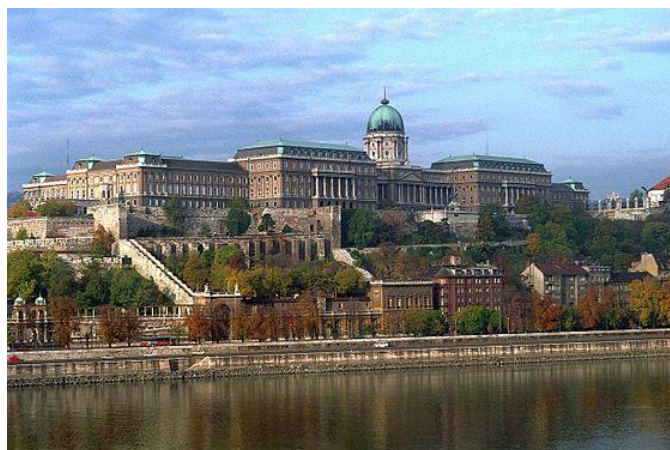
ハンガリー (ブダペスト) (1993年9月)

この調査で最初に訪問したのはハンガリーで、1991年まで続いていたソ連邦時代の社会主義体制から脱却しようとしており、国営企業の民営化を進めていた。西欧諸国との関係を強化するため、自由主義経済への移行が急務だったからである。環境分野については石炭火力・金属精錬・化学工業の集積地域で大气汚染が深刻だったが、酸性雨による森林被

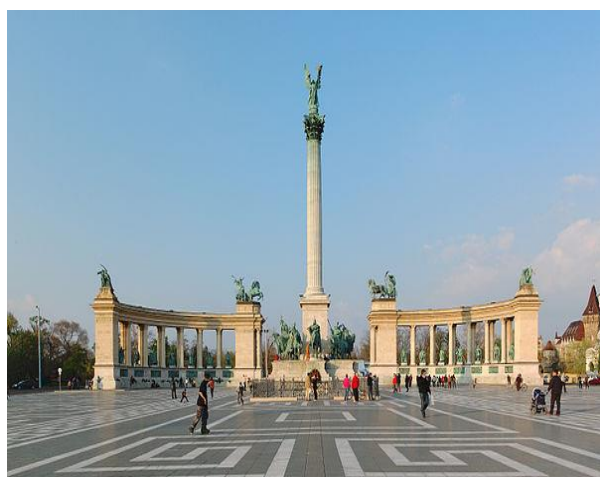
害は予想より少なかった。エネルギー構成は石油 33%、天然ガス 31%、原子力 14%、石炭 21%で、他の東欧諸国よりもバランスがとれていた。製油所は燃料脱硫が不十分で、製品重油の硫黄分が 3%と高く、工業地帯の大気汚染の主因になっていた。首都ブダペストの暖房用燃料は石炭から天然ガスに切り替えられていて、冬季のスモッグは改善されていた。一方、自動車は旧式が多く都市部の環境悪化の要因になっていた。

初めて訪れたブダペストは歴史遺産に恵まれた美しい街だった。ブダペストはドナウ川西岸のブダと東岸のペストが統合してできた街で、ハンガリーの政治、文化、商業、産業、交通の中心地である。半日程度だったが、経産省の駐在員がブダ城・英雄広場・漁夫の砦などを案内してくれた。城壁に迫力があるブダ城は外観が美しい壮大な建築で、王宮が国立美術館になっていた。英雄広場はブダペストを代表する美しい広場で、中央には建国 1000 年を祝って建てられた高さ 35m の記念碑がある。その左右には大きな石柱が並んでいて、石柱の間には歴代の王や英雄など 14 体の彫像が立っている。

漁夫の砦はカタツムリに似た形の回廊がある尖塔が特徴である。ここに中世時代からドナウ川で漁をする漁夫たちのギルドがあったことから、この名がついたらしい。眼下にド



ドナウ川に面したブダ城



ブダペストの英雄広場



漁夫の砦（ブダペスト）

ナウ川、その先にはペスト地区の古い街並みが広がり、中世の都市にいるような感覚に捕らわれた。喉が渇いたので広場のカフェでビールを飲んでいたら、前の小さなステージで数人の少女がビール瓶を頭に乘せてダンスを踊り始めた。喜んだカフェの客は手拍子でダンスに応え一帯が楽しい雰囲気にもまれた。夕刻、ホテルの近くの小さな劇場にオペレッタを見に行った。オペレッタは小規模なオペラという意味で、一般的なオペラより台詞と踊りが多かった。初めて見たので、気軽に楽しめる庶民的なジャンルということがよくわかった。踊りはテンポが早く楽しげで面白かったが、台詞がわからないのでストーリーは理解できなかった。

ポーランド（ワルシャワ）（1993年10月）

ハンガリーでの数日の滞在の後、われわれはポーランドのワルシャワに行き、日本大使館や商工省を訪問して情報を収集した。環境行政機関も訪問して、統計データだけではわからない実態をヒアリングで確認した。ポーランドのエネルギー構成は、石油 15%、天然ガス 8%、石炭 76%で原子力発電はなかった。石炭への依存度が非常に高いのが特徴で、しかも良質な石炭は輸出に回し、国内消費はカロリーが低くて硫黄分の多い褐炭が中心だった。このため、製鉄など重化学工業が集中する南部クラクフ地方の大気汚染が激しいことがわかった。南西部から南部にかけてのシレジア地方は、いわゆる黒い三角地帯の一角で、季節風の影響で酸性雨がポーランド全域の森林に被害を与えていた。首都ワルシャワは地域熱供給のための石炭燃焼排ガスと、自動車排ガスが大気汚染の主因といわれていた。しかし地形が平坦で大気が拡散しやすいことから、滞在中は汚染を意識することがなかった。

スケジュールの合間にワルシャワの市内と旧市街を歩いてみた。市内は道路が広く開放的で中心部にショパン博物館があった。入館する時間はなかったが、ここにショパンが弾



フレデリックショパン博物館



ワルシャワ旧市街

いていたピアノや身近な生活用品が展示されている。ワルシャワは長い歴史のある文化都市だが、ポーランドという国名とともに第 2 次世界大戦の記憶が生々しい。ドイツに隣接していたことと、ユダヤ人が人口の三分の一を占めていたことから、ワルシャワの街は 1944 年に壊滅的な破壊を受けた。映画「戦場のピアニスト」には、すべての建造物が破壊されてガレキの廢墟となった情景が再現されている。大戦末期のワルシャワ蜂起では約 20 万人の市民が命を落とし、約 70 万人がドイツ軍に逮捕されて強制収容所に送られた。街ごと抹殺されたのに等しい大被害である。しかし戦後、残された市民が町並みをレンガの割れ目まで丹念に修復し見事に中世の町並みを復活させた。このため、旧市街広場にも戦禍の傷跡は見られない。

ポーランド(クラクフ) (1993 年 10 月)

ワルシャワでの訪問ヒアリングを済ませた次は、ワルシャワから 250 キロメートルほど南のクラクフに行った。クラクフは 17 世紀までポーランドの首都で人口は約 80 万人である。1990 年まではアルミ精錬やソーダ工場が硫黄酸化物と窒素酸化物を排出し、地形が盆地で大気の循環が悪かったことから大気汚染が激しかった。しかし訪問した環境保護局と製紙工場や製鉄所の話によると、暖房の燃料転換と工場閉鎖で大気汚染は大幅に改善されたとのことだった。

環境保護局は市中心部の建物にあったが、エレベーターに立体駐車場の方式が採用されているのに驚いた。しかも連続運転だからいつでも乗り降りできるのである。各フロアには、上り専用と下り専用の乗降口があったがドアはなかった。動いているボックスに乗るのだから最初は少し怖いと思ったが、非常にゆっくりと動いているので全く問題なかった。連続運転なので普通のエレベーターの何倍もの人を運べるのに違いない。感心して乗っていたら、降りる階を通り越して次の階に登ってしまった。降りて隣の下り用に乗り換えればよかったのだが、面倒なので乗っていたら 5 階まで行って横に移動し下り用になった。この方式だと誰も降りる階のボタンを押す必要がなく待つこともない。一般的なエレベーターより構造が簡単で、費用も安いのではないだろうか。だが、他の国では見たことがない。乗り降りに多少の危険があるのだろうか。それとも感覚的に馴染めないのだろうか。

クラクフの市内には、大戦中にユダヤ人の強制収容所があったので跡地に行ってみた。ナチス・ドイツはワルシャワと同様にクラクフでもユダヤ人の居住区を狭く限定し、出入りを厳しく制限していた（俗称：ゲットー）。しかし大戦末期にはゲットーも廃止して代わりに強制収容所を作り、ユダヤ人を家族単位ではなく男性・女性・子供別に収容した。目的は効率よく強制労働をさせるためである。栄養不足や病気などで労働に耐えられなくなると、アウシュビッツの絶滅収容所に送りガス室で殺害していた。

クラクフの強制収容所跡は、今はほとんどが住宅地になっていて当時の面影はない。しかし収容所の入口に使われた道路の一部がフェンスに囲まれて残されていた。ユダヤ人の墓を壊し、その墓石を敷石に使用していたからである。オスカー・シンドラーの映画「シンドラーのリスト」はこの収容所を再現していて、「クラクフ」と書かれた大きな看板が映っている。シンドラーの食器工場は強制収容所の近くにあり、収容所の所長に賄賂を渡して大勢のユダヤ人を雇い入れていた。その結果、数千人のユダヤ人が絶滅収容所への移送を免れ生き残れたのである。



クラクフの強制収容所で敷石に使ったユダヤ人の墓石

ユダヤ人の強制収容所跡に続いて、クラクフの西方約50キロメートルにあった絶滅収容所にも行った。絶滅収容所は主に2か所に建設され、第1収容所はドイツ語でアウシュビッツ収容所と呼ばれたが、地理的にはポーランドのオシフィエンチム市にあった。第2収容所は隣接するビルケナウ収容所で、ポーランドのジェジンカ村にあった。欧州の各地から送られてきたユダヤ人の強制労働は、主に4つのタイプに分けられていた。一つ目は肉体的な消耗を目的とした労働で、石切り場の碎石作業や道路の舗装工事などである。場合によっては「午前中に穴を掘らせ、午後はその穴を埋める」といった作業を命じられ、収容者の多くが短期間のうちに死亡したとされている。

二つ目は戦争の遂行に必要な資材や兵器の生産と、収容施設の維持・管理などの労働だった。これには何らかの技能や知識を持つ収容者が当てられた。電気、機械、化学、建築、土木などの技術者と医師である。しかし劣悪な食料と蔓延する伝染病で命を脅かされる状況にあったことに変わりはない。三つ目はガス室と病気や栄養失調で死亡した遺体を焼却炉に運んで処分する労働である。彼らはゾンダーコマンド（特別労務班員）と呼ばれ、収容者の中では待遇がよい方だった。しかし口封じのため、数ヶ月ごとに彼ら自身も殺害され焼却処分された。四つ目は収容者を監視するカポ（労働監視員、収容所監視員）で、

犯罪歴のある者が多く、収容者に過酷な懲罰を課したことで戦後に裁かれる者もいた。

訪問したのはアウシュビッツ収容所で、現存、施設は「ポーランド国立オシフィエンチム博物館」になり内部が公開されている。入口のゲートには「働けば自由になれる」と書かれた当時の看板が残されていたが、生き残れたのは数パーセントに過ぎない。中に入ると大きな部屋で施設概要の説明があった。多くの国から来訪者が来るので、英語、ドイツ語、フランス語など 6ヶ国語が用意されており、選んだ言葉の受信機を借りるようになっていた（日本語はない）。説明が済んで順路に沿って進むと、犠牲者が残したおびただしい数の革カバン、めがね、靴、義足、義手などが展示されていた。でも死の運命に直面した犠牲者の緊張感は伝わってこなかった。数メートルもの高さに積み上げられていたが、品目別に整理されていたので緊迫感がなかったのと、ガラス越しだったからであろうか。それに年月がたって埃をかぶっており、ただのごみの山のようにも見えたからである。



入口の看板（働けば自由になれる）



収容所棟の内部



収容者の制服



遺体の焼却炉

一方、シャワー室に見せかけたガス室と、遺体を焼いた横並びの焼却炉には恐怖感を覚えた。裸でシャワー室に急かたてられた犠牲者は、それでもまだ助かる見込みが残っていると思っていたのではないだろうか。ガス室から遺体を引き出して手押し車にのせ、焼却炉に運ぶ収容者は何を思っていたのであろうか。骨と皮ばかりの痩せ細った遺体には子供や幼児も混じっていたであろう。いずれは自分も「処分」されることを知りながら、その日だけを生きるしかなかったのであろうか。

収容所は数ヘクタールの広さで、当時は 100 棟以上の収容棟が並び、敷地全体が鉄条網に囲まれていた。鉄条網は乗り越えられないように、鉄骨の上部が内側に曲げられていて高圧電流が流れていたのである。通訳をしてくれたガイドの話によると、終戦で収容所から生還した親戚があり、今でも縞模様の服は決して着ないそうだ。収容者の制服が縦縞だったからである。極限状態の体験が一生消えないトラウマになってしまったのだ。



収容所の鉄条網



収容所棟

この収容所訪問で二つのことに気がついた。一つは訪問者が非常に多く 2010 年には 138 万人に達した点にある。悲劇を語り継ごうと、社会学習に取り入れている地元ポーランドとドイツの学校の生徒が多いとのことだった。私が訪問した時も 10 代と思われる学生のグループが多かった。日本も大戦を経験しているが、悲劇の現場を学生の社会学習に取り入れているだろうか。広島には原爆記念館があるが、被害だけでなく加害の歴史も学べる戦争博物館が必要ではないだろうか。もう一つは、訪問者に加害国と被害国の意識の差が感じられなかった点にある。ドイツ人にしてみれば自国が犯した戦争犯罪だから、訪問するには罪悪感がともなうと思われる。一方、被害が大きかったポーランドの訪問者はドイツ人に対して反感や憎しみが残っていて当然であろう。だが訪問者にはそうした罪悪感も反感も見られなかった。過去の戦争犯罪は事実なのだから、悲劇を繰り返さないために事実を徹底的に検証し、認識を共有する必要があると考えているのであろう。

では日本と中国や韓国の場合はどうであろう。日本は日本軍の戦争犯罪を徹底的に検証し中国や韓国と認識を共有する努力をしてきただろうか。韓国や中国も、日本の戦後賠償も含めて事実を自国民に広く開示してきたであろうか。政治的な思惑から、客観的な事実の共通認識よりも情緒的な反日感情を利用してきたのではないだろうか。私は日本、中国、韓国が協力して先の大戦に関する戦争博物館を作り、3 国の学生たちの社会学習の場になればよいと思っている。

チェコ共和国（1993 年 10 月）

ハンガリーとポーランドの調査を終了したわれわれは続いてチェコに向かった。チェコの環境関連機関と工場を訪問するためだが、私は入国できるのかどうか不安だった。というのも、この調査の直前まで別件で北欧に出張していたために、チェコのビザを取得できなかったからである。空港で入手できると聞いていたが、もし入国できなければ帰国しなければならない。でも入国審査で係官にビザがないことを告げると、別室で簡単にビザを発給してくれた。

事前調査と訪問調査で、チェコのエネルギーは石炭 64%、石油 16%、天然ガス 13%、原子力 7%ということがわかった。大気汚染源は主に石炭に起因する硫黄酸化物で、大気への放出量が年間 200 万トンと日本の 2.5 倍に達していた。汚染が激しいのは石炭火力発電が集中する北ボヘミア地方で、住民に気管支疾患が発生していた。大規模な石炭火力発電所は排煙脱硫設備を設置しようとしており日揮も 1 基を受注していた。

後日談になるが日揮の受注額は約 52 億円なのに、結果的にその 2 倍以上の費用がかかり納期は 1 年も遅れた。私は環境技術部長としてこの受注に反対だった。受注を進めた事業部に海外案件の経験が乏しかったからである。大損失の原因は明らかにプロジェクトマネジメントの能力不足にあった。設計情報の伝達ミスで土木工事がやり直しになり、メーカーから納入された吸収塔は強度不足で再製作に追い込まれた。建設実績がない国でのプロジェクトは損失が発生しやすいのだが、これほど巨額になるとは思わなかった。しかも納期が 1 年も遅延したことから、日揮はチェコの案件を継続受注できなくなった。当然のことだが事業本部長は役員を解かれ、プロマネは始末書を書かされた上に数年間の昇格停止処分になった。私は関係者の処分は止むを得ないが、担当したプロマネには同情する。この本部は受注量が予定より大幅に少なかったので、本部長が売り上げの確保に焦ったのだ。海外プロジェクトの経験が豊富な他の事業本部の反対を押し切って受注したので、問題が発生しても社内で支援を得られず、必要以上に損失が拡大したのである。

チェコでは日本大使館で現地の情報を集め、環境省と商工省を訪問し、大規模な火力発電所を視察した。この発電所の燃料は褐炭で、硫黄分は 1.2%、水分が 28~30%、灰分が 25~28%だった。水分が多いので発熱量が少なく、2600~2900 キロカロリー/キログラムしかなかった。この発熱量は日本で使っている石炭の半分以下で、日本の清掃工場で焼却している廃棄物に近い数字である。したがって発電量あたりの硫黄酸化物は、日本の 2 倍ぐらいになるであろう。灰分が多いのも褐炭の特徴で、150 ヘクタールもの灰捨て場があった。発電所のエンジニアと話す機会があったが、給与は日本の水準より低いものの別荘を持っている者が多かった。北欧諸国もロシアも別荘を持つ労働者が多い。日本人から見ると贅沢に思えるが、週末に通って野菜を作っている人が多く実用性もあるのだろう。

チェコの首都プラハは、中世の街並みそのまま残る美しい街だった。旧市街の広場が中心で、中央に宗教改革者ヤン・フスの大きな銅像がある。周りにはガラス細工など工芸品の店が並び、覗きながら歩くだけで楽しい。広場の一角に有名な天文時計があるのだが、二重に重なった丸い形や色彩が芸術品のように美しい。



旧市街広場



天文時計

旧市街広場と周辺の街の間にあるのがカレル橋で、1357年に建設が始まり 1402年に完成している。橋の長さは 515.7メートル、幅は 9.5メートルである。アーチ形の 15 個の橋脚の上に切石の橋桁が渡されている。3 つの橋塔が建てられており、旧市街側の橋塔はゴシック様式の建築として名高い。橋の欄干には両側に 15 体ずつ、合計 30 体の彫像が並んでいる。最も古いのは「十字架像」で 1361 年の文書に登場する。その後 1714 年までに合計 28 体の彫像が製作され据付けられた。これらの彫像の中で著名なのは「十字架像（ゴルゴダの丘で磔にされたキリスト像、Crucifix and Calvary）」、「ブルンツヴィーク像

「Brunčvík column）」と「聖人ヤン・ネポムツキー像（St. John of Nepomuk）」である。聖人ヤン・ネポムツキー像の基部にあるレリーフに触れると幸運が訪れるといわれ、多くの人に触れられてつるつるになっていた。



ブルンツヴィーク像 ヤン・ネポムツキー像

カレル橋

プラハで気がついたのだがビアホールが多い。私が泊まったホテルは旧市街広場から地下鉄で数駅の住宅地区にあったが、ここにも広いビアホールがあり大勢の客がビールのジョッキを傾けて談笑していた。食べ物はポテトとソーセージで値段は安かったと思う。この地下鉄では思いもかけず集団スリに遭遇した。私はドアのそばに立っていたのだが、数人の若者が寄ってきて、その一人が私のポケットに手を入れてきたのである。残る仲間は見張りのようで、周囲の客から見えないように私を囲んできた。幸いにも少し離れていた同行者が近寄ってきたので、何も取らず離れていった。私は外国でホテルにチェックインすると、パスポートとまとまった現金をセイフボックスに入れてしまう。だから取られても100ドル以下しかないのだが予期しなかったので少し驚いた。身なりもラフなジャンパーを着ていただけだが、やはり外国からの観光客に見えたのであろう。チェコの滞在は短かったがプラハの街が気に入った。お土産にはボヘミアンガラスのグラスを買った。多少は安かった気がする。

ブルガリア（1994年2月）

ハンガリー、ポーランド、チェコ共和国の調査が終了し、環境改善の提案を含む報告書を提出して半年が経つと、今度はブルガリアとルーマニアの調査を依頼された。依頼元は今度も海外コンサルティング企業協会だから資金の出所は経済産業省であろう。環境汚染と対策の先進国として、東欧諸国の環境の状況を把握し支援策を計画する必要があったの

だ。ブルガリアとルーマニアは東欧諸国の中でも国民総生産が少なく、それだけに経済効果の優れた環境対策が必要だった。今度の調査チームは大気環境に詳しい専門家と、環境対策技術の研修を実施している組織のリーダー、それに海外コンサルティング企業協会のコンサルタントと私の 4 名だった。私の役割は前回と同様に環境改善の基本政策を提案することで、エネルギー政策、産業政策、行政政策が含まれていた。調査チームは数か月の事前調査の後、フランクフルトからブルガリアのソフィアに向かった。

ソフィアに着いたのは夕刻で、日本で環境対策の研修を受けた技術者が迎えてくれ、日本食レストランで歓迎してくれた。彼の気配りには感謝したが、食事はお世辞にも美味しいとはいえなかった。ウェイトレスは浴衣みたいな和服でサービスしてくれたが、大柄の肩のいかつい白人が着物を着ても似合わないと思った。次の日は午前中にソフィアから 50 キロメートル離れたボボブドール火力発電所を訪問し、工場を見て説明を受けた。

発電所の建設は 1970 年～1972 年で、ボイラー、タービン、発電機など主要機器がロシア製、電気集塵機はポーランド製だった。出力は 25 万 kW が 3 系列で地域熱供給はなく、かなり単純な設備構成だった。燃料は近傍で採掘される褐炭で、燃焼に寄与しない灰分が 50%から 65%もあり、水分も多いことからカロリーが低かった。そららく 2,000 キロカロリー／キログラム以下だろう。硫黄酸化物の環境への放出量は約 10 万トン／年で、日本全体の八分の一に達していた。灰は水と一緒にスラリー状にし、ポンプで約 8 キロ離れた谷に運んで投棄していた。現場の技術者を含む従業員は勤勉で設備管理の水準は高かった。

午後は黒海の西岸にあるブルガスの製油所に行った。首都ソフィアから約 450 キロメートルも離れているので 7 時間のドライブになった。製油所の精製能力は年産 800 万トン（約 20 万バレル／日）で、年産 40 万トンのエチレン製造装置もあった。ボイラー燃料には硫黄分 3.8%の重油を使用していたが排煙脱硫装置はなかった。したがって二酸化硫黄が 3500ppm 程度の排煙を排出していたであろう。日本では考えられない高濃度で、製油所も問題を認識していたが設備費用の確保が課題だった。窒素酸化物については、全く対策が講じられていなかった。省エネルギー対策の重要性は十分に認識しており、エネルギー効率の向上に努力していた。

製油所からソフィアに戻った次の日は粗鋼生産能力 200 万トンの一貫製鉄所を訪問した。この製鉄所は 1960 年代の建設で電気集塵機も設置されていた。しかしその後の煤塵に関する規制の強化で排出量を大幅に削減しなければならず、その対応に苦慮していた。説明してくれた役員や担当者から、環境対策へのまじめな取り組みが感じられたが、設備資金の不足がネックになっていた。製鉄所を訪問した後はただちに空港からルーマニアに向かったので、残念ながらブルガリアの街は全く見ていない。

ルーマニア（1994年2月）

ブルガリアを離れたその日の夕方にルーマニアのブカレストに着いた。ホテルは市街地の中心部にあり、建物の色とデザインが街の雰囲気とよく調和していて気に入った。チェックインしても夕食まで多少の時間があったので周辺を散策した。すぐに気がついたのは人種の違いである。ブルガリアはスラブ系が多いがルーマニアは西欧系の白人に近い気がした。体格は西欧諸国より小さいが白い肌に金髪や銀髪の美男美女が多い。国の名前からわかるように昔はローマ帝国の領土だったから、ローマ人が多く残ったのではなかろうか。

私が散策に出ている間に同行の一人が散髪に行ってきたが、完全に地元の人と同じ髪型に変わっていた。本人の希望ではないはずだが、外国で理髪店に行くと言葉が通じないから髪型の注文が伝わらないことが多い。ゼスチュアで注文を伝え了解した返事があっても安心はできない。現地の理髪店は現地の髪型しかできないと思った方がよいかもかもしれない。だから私は、なるべく外国では理髪店に行かないようにしているのだが、長期になると行かない訳にはいかない。この数年後に私は中央アジアに3カ月滞在した。そのときも理髪店では横を短くしないように伝えたのだが、結局、薄い髪をバリカンで短く刈り上げられ、日本に戻った時に恥ずかしい思いをした。

夕食はホテルで評判のよいレストランを聞いて出かけ、美味しい料理に満足した。レストランでは数人のバンドが客席をまわって地元の音楽を聞かせ、リクエストにも応じていた。女性の歌手が一人いて声がきれいだったので、私も好きな曲をリクエストして豊かな声量に感激した。ヨーロッパだけでなく、アジア諸国でもレストランで生の音楽を楽しむことが多いが日本ではめったない。ホテルのバーも生の音楽が少ないのはなぜだろう。

夕食を済ませてホテルに戻り、部屋に入ると電球の一つが点灯しないので交換を頼んだ。するとスタッフが来て切れた電球を確認し、隣の客室から同じ電球を取ってきて交換した。在庫の新しい電球ではなく隣室の電球と交換したのに驚いたが、慣れた様子だったからいつもそうしているのであろう。隣室の電球をすぐに補充するのかどうかは大いに疑わしい。旧社会主義国は、消耗品や交換部品の在庫がないことが多いからである。

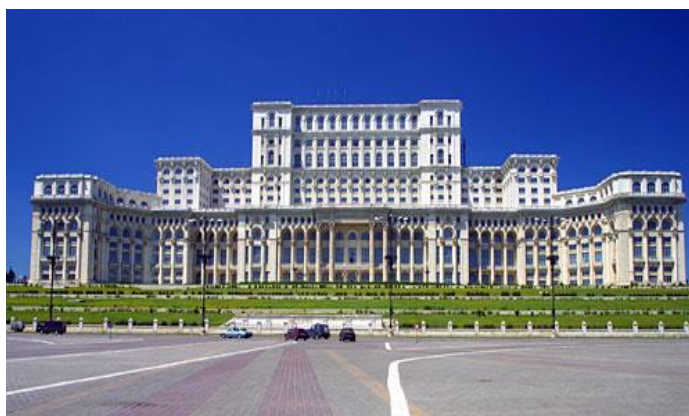
次の日は朝からルーマニア首相府や日本大使館などを訪問し、環境汚染と対策の説明を受けて資料を入手した。でも4時頃には終わったので市の中心部に出かけた。最初に行ったのはルーマニア共産党本部庁舎前の広場である。ここで1989年の12月に独裁者だったチャウシェスク大統領が、支持者を前に最後の演説を始めた。しかし演説の途中で反対派が爆弾を爆発させたので聴衆がパニックに陥り、軍が出動して群衆を強制的に解散させた。

だが数日後に鎮圧を命じられた軍が大統領に反旗を翻し、ルーマニア政府は崩壊に至ったのである（ルーマニア革命）。国外に逃亡しようとした大統領夫妻は拘束され、この演説から 4 日後に銃殺刑に処せられた。長年の独裁政権が国民の窮乏を招き、抵抗する者を秘密警察が弾圧してきたから恨みを買っていたのである。

チャウシェスク大統領が建設していた「国民の館」にも行って見た。ルーマニア議会の議事堂を兼ねたチャウシェスクの宮殿として工事が進んでいたが、ほぼ完工に近い状態で



国民の館（背面）と道路



国民の館（正面）

中断していた。延床面積（330,000 平方メートル）は世界第 2 位の広さで、地上 10 階、地下 4 階、部屋数は 3000 もある。内部の装飾は贅を尽くした豪華さといわれるが、行った時は門が閉ざされていて外から眺めるだけだった。ガイドを兼ねた現地の通訳は国民の恥だと吐き捨てるように言っていた。冬だから一面が雪の原で、足跡が全くなかったから人の出入りがなかったのであろう。なお、現在は豪華な装飾のホールや廊下など建物の一部が有料で公開されており、国内外から観光客を集めている。国民の館を中心に広い通りが放射状に整備され、高級な集合住宅が並んでいた。チャウシェスク大統領の親族や支援者など、政権幹部の居住用に用意したのであろう。

次の日はブカレストから 60 キロメートルほど北にあるプロイエシュティに移動し、製油所と石油化学工場、および肥料工場を訪問した。プロイエシュティは東欧では希少な産油地域で、製油所が 19 世紀から稼働していた。このため、第二次大戦中はドイツの燃料供給基地になり連合国の爆撃を受けている。製油所の原油処理量は約 350 万トン／年で、国内の原油が約 3 割、中東からの輸入原油が約 7 割だった。製油所の燃料には硫黄分の多い重油が使われていたが排煙脱硫装置はなかった。したがって、この製油所だけで年に約 1 万トンの硫黄酸化物を環境に放出していたであろう（日本：約 80 万トン／年）。窒素酸化物については全く対策が講じられていなかった。化学肥料の工場は硫安とリン酸系肥料を製造していた。硫安の原料はバイライト（黄鉄鉱）だったので、製油所に硫黄回収装置を設

置して原油に含まれる硫黄を回収して利用すれば、資源の節約と環境対策が同時に成立することを伝えた。

プロイエシュティの工場訪問を終わらせると、今度はルーマニア中央部に位置するブラショフに移動した。ブラショフはルーマニアでは最も繁栄する地方の一つで、工業都市の産業構造と伝統が残されている。第二次世界大戦中にはメッサーシュミットなどの航空機が作られていた。その後の共産主義政権下ではさらに工業化が進み、これらの遺産が大規模な産業基盤になって残されている。プロイエシュティからブラショフまでは約 150 キロメートルで、列車で行く予定だったが雪で運行停止になってしまった。そこでミニバスをチャーターし、雪道を4時間もかかってたどりついた。ブラショフでは、地域の工場に電力を供給する石炭火力発電所を訪問した。燃料は褐炭が約 9 割で、低いカロリーを補う目的で天然ガスを約 1 割使っていた。褐炭は周囲の炭鉱から鉄道で搬入していたが、炭鉱の約 4 割が 50 キロメートル、3 割が 120 キロメートル、3 割が 230 キロメートルも離れていた。これだけ遠いと輸送コストが高いだろうと思った。

この発電所は 1973 年から 1975 年に建設され、主要な設備はロシア製だった。大気汚染防止のため、ボイラーの下流にはポーランド製の電気集塵機を設置していた。排煙脱硫設備は設置していなかったから、石炭の硫黄分から考えると 1 年に約 5 万トンの硫黄酸化物が大気に放出されていただろう。窒素酸化物対策は全く講じられていなかった。燃料に褐炭を使用しているので灰分が多く年間で 130 万トンもの灰が残る。この残灰は水を混ぜてスラリー状にし、15 キロメートル離れた灰捨て場に投棄していた。この発電所は清掃が行き届いていて感じがよく、説明もていねいで自分達で建設し運転している誇りが感じられた。一方、プラントはかなり旧式で、中央制御室の計測機器が全部アナログ式だった。日本では 1970 年代にデジタル式に代わっていたから、数値ではなくメーターの針で運転を監視している姿が懐かしかった。所長が昼食をご馳走してくれ、発電所の歴史を 2 時間以上も話してくれた。自慢話が長いので聞いている方が疲れたが、日本人の来客が嬉しかったのであろう、お土産に地元で生産しているワインまでくれた。

次の日は午前中の予定がなかったので、郊外にあるブラン城を見に行った。この城は 1388 年に建設され、改修を重ねて今日に至っている。城主は数世紀にわたっていろいろと代わってきたが、敵だったオスマン帝国の兵士を串刺しにして一列に並べた凶暴な城主もいた逸話がある。ブラン城はドラキュラの城としても有名である。19 世紀末に、作家ブラム・ストーカーが「吸血鬼ドラキュラ」という小説を発表し、その中で登場するドラキュラ城がブラン城を模したものだったからである。内部は 4 階層にわたって陶器、家具、武器や甲冑のコレクションが展示されている。訪問したのは 2 月だから観光客はなく、それでも留守番の管理人が内部を案内してくれた。観光スポットだからシーズンには国外から

の観光客が多く、地元のイベントにもよく利用されているとのことだった。ブラショフからブカレストへ車で戻ったが、途中は雪の田園風景が広がり、この国が農業国ということがよくわかった。



ブラン城の外観



ブラン城の内部

東欧諸国の社会的な背景

- ① 私が訪問した東欧諸国（ポーランド・ハンガリー・チェコ・ブルガリア・ルーマニア）の共通の特徴は、数十年の長期間にわたって旧ソ連圏に属し、モスクワ共産党の支配下または強い影響下にあったことにある。このため、ソ連崩壊後も政治形態だけでなく経済や社会の仕組みに当時の影響が残っている。ただし影響の程度は国によって差異があり、ソ連圏に属する約 100 年前が自由主義の独立国だった国は影響が小さい。一方、当時が独立国として未成熟だった国々は残された影響が大きいように思える。人口は 6 カ国の中でポーランドが最多だが日本に比べれば少ない。それぞれ多様な歴史と文化が背景にあるのが東欧諸国の特徴といえよう。
- ② ハンガリーは広大な平原に恵まれており基本的に農業国である。国土面積は約 10 万平方キロメートルで北海道より 1 割ほど広く、人口は約 970 万人である。ブダペストは中世の都市の景観を残している。各地に温泉が湧き出ており、公衆浴場が古くから建設・利用されてきた。
- ③ ポーランドの面積は約 31 万平方キロメートルで人口は約 3800 万人である。このうち約 170 万人が首都ワルシャワに居住している。鉱物資源が豊富で、石炭を中心として多種多様な非鉄金属資源にも恵まれている。歴史的に何度も大きな国際紛争に巻き込まれ、領土と人口の移動が激しかった。ユダヤ人が多かったことからナチス・ドイツによる迫害で多くの犠牲者を出し、大規模な強制収容所の跡地が残されて遺品が展示されている。ワルシャワの旧市街は戦災による破壊の後に完全に復元されている。
- ④ チェコの面積は約 8 万平方キロメートルで、ハンガリーの 8 割程度である、人口は約

1100 万人でハンガリーより少し多い。早くから産業の近代化が進み、現在の輸出品目は機械・輸送機器・化学製品・金属などで、輸出国はドイツ・スロバキア・ポーランド・オーストリア・フランスなどである。首都プラハは美しい街で歴史的な文化遺産が多く観光地として人気が高い。カラフルで精巧なボヘミアンガラスが有名。エネルギーは石炭依存度が高く約6割を占めており、約3割が原子力発電によるものである。

- ⑤ ブルガリアの面積は約 11 万平方キロメートルで、人口は約 690 万人である。主要な産業は農業（穀物・酪農）と工業（化学・石油化学、食品加工、自動車部品）。エネルギーは石炭依存度が高く、しかも低質な褐炭なので水分と灰分が多く火力発電所の残灰処分が課題。現場の技術者を含む従業員は勤勉で設備管理の水準は高い。
- ⑥ ルーマニアの面積は約 24 万平方キロメートルで人口は約 1900 万人である。歴史的に何度も他民族の侵入があり、現在は多種多様な民族で形成されている。主要な民族は紀元前から住んでいたトラキア系のダキア人、2 世紀ごろにこの地方を征服した古代ローマ人、7 世紀ごろに侵入したスラブ人、9 世紀に侵入したマジャール人などである。基本的に農業国で第一次産業の就業人口が約 4 割を占めている。一方、社会主義時代の計画経済で工業化が進められた結果、現在では鉄鋼やアルミニウム、繊維産業といった業種も主要産業となっている。

海外で心に残った記憶と背景（東ヨーロッパ編） 終わり